
研 究 報 告

看護短期大学における学生の自尊感情の変化に関する縦断的研究 －臨地実習各期の自尊感情測定を通して－

原田 真澄¹, 木村 美智子²

The Transformation of Self-Esteem of Nursing Students : The longitudinal Study during Clinical Nursing Practice

HARADA Masumi, KIMURA Michiko

キーワード：自尊感情、看護学生、臨地実習、縦断的研究

Key Words : self-esteem, nursing students, clinical nursing practice, longitudinal study

Abstract

The purpose of this study is to clarify the characteristic of the transformation of self-esteem by clinical nursing practice of nursing students. The subjects of research are 73 nursing students who have enrolled at the Nursing Department of Junior College A in 1999. We have measured nursing students with the self-esteem scale (SE- I scale) three times during the basic nursing education. We have obtained valid responses from 42 nursing students (57.5%). We performed the Friedman test and drew multiple-comparison after a factor analysis.

As a result, the significant difference was not examined in the score of self-esteem in all three times of measurement. In addition, as for the score of "the factor about anxiety in the towards other people scene", the significant difference was not examined like the self-esteem score, but the score of the factor became higher slowly. These results suggested that the students mind the evaluation from another person, but they could have confidence relation with the others during clinical nursing practice.

In addition, the significant difference was not examined in the transformation of the self-esteem score that I examined according to self-esteem group either, but the students of the low group of self esteem became higher slowly, and, as for the students of the self esteem high group became lower slowly. These results provided suggestion that clinical nursing practice have the process that kept self-esteem a moderate standard.

¹ 藤田保健衛生大学 衛生学部

受付日：2007年9月10日

² 日本赤十字豊田看護大学 看護学部

採用日：2007年12月26日

要旨

本研究の目的は、臨地実習をおこなう看護学生の自尊感情 (SE) の変化の特徴を明らかにすることである。調査対象は1999年にA看護短期大学に入学した学生73名である。自尊感情測定 (SE-I 型式尺度) は3回おこない、3回ともに有効回答が得られた42名 (57.5%) を分析対象とし、因子分析後にFriedman検定および多重比較をおこなった。

その結果、SE得点は各測定時期において有意差はみられなかった。また「対人場面における不安に関する因子」についても、同様に有意差はみられなかったが、徐々に得点が高くなる傾向がみられた。このことから、学生は実習を通して、他者からの評価を気にしながらも、対人場面における対応に自信をもつことができるような変化がみられることが示唆された。

またSE群別にみたSE得点の変化においても有意差はみられなかったが、SE低群の学生は徐々にSEが高くなり、SE高群の学生は徐々にSEが低くなる傾向がみられた。このことから臨地実習は、SEを適度な水準に保つ過程を有することが示唆された。

I. 緒言

看護基礎教育において臨地実習は、看護実践能力の育成に不可欠である。学生は臨地実習において「看護する喜びや難しさとともに、自己の新たな発見を実感し、対象者に対する責任を認識しつつ、看護の特質を理解し学習を深めていく」(看護学教育の在り方に関する検討会, 2002, p.20)。そして学生はこの過程を通して大きく成長していく。

一方、臨地実習をおこなう学生の多くは青年期にあり、アイデンティティの確立という自我の発達課題を有しており、精神的な葛藤や不安を抱え、自尊感情はゆらぎながら、変化しつつ人格的な成熟へと向かう時期である。

自尊感情は、「人間の社会的行動、例えば他者の表出に対する反応、社会的参加を規定する重要な要因」(遠藤, 1981, p.64)と考えられている。マズローは自尊感情を人間の基本的欲求に位置づけており、すべての人は、安定した自己尊重あるいは自己尊敬の要求をもつと考えた。また梶田は「自尊心とは、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚であり、心理的な土台として不可欠で、これを十分に持たないまま生きていくことは困難である」(梶田, 2002, pp.94-97)としている。このようなことから、筆者らは学生が実習を通して看護者としての喜びにふれ、看護の意義を体得し成長するためには、学生の自尊感情が適度なレベルで安定していることが望ましいと考えた。

看護学生の自尊感情 (self-esteem、以後SEと略す) に関する先行研究では、臨地実習前後のSEの変化に関する研究報告が多くみられ、菅野らは実習前後の比較において実習後にSEが有意に高く、またSEと実習満足感の間には有意な相関があることを明らかにした(菅野ら, 1997, pp.129-131)。また片岡らや福田らは、精神看護学実習前後のSEの変化とコミュニケーションや学習課題達成感との関連について報告しており、精

神看護学実習前後の比較では実習後にSEが有意に高く、患者とのコミュニケーションがはかれたと自覚している学生や学習課題達成感が高い学生は、精神看護学実習後にSEが有意に高いことを明らかにしている(片岡ら, 1999, pp.55-66; 福田ら, 2000, pp.24-26)。さらにSEと患者-学生関係に関する研究では、学生の自尊感情の程度により患者-学生関係の成立のプロセスに差があるという報告がみられる(梶谷ら, 1996, pp.133-143)。また酒井は自己教育力に関連する要因としてSEに注目しており、SEの高い学生は自己教育力が高いことなどを明らかにしている(酒井, 2000, pp.113-128)。このように看護学生のSEに関する先行研究では、ある特定の領域における臨地実習前後のSEの変化に関するものが多くみられるが、基礎看護学実習から各領域実習までを含めた各時期においてSEの変化を縦断的に調査し研究したものは少ない。

看護基礎教育において臨地実習は必要不可欠な位置づけとなっているが、人格的な成熟への地固めの時期にある看護学生にとって、患者との出会いや臨地実習指導者をはじめ病院スタッフとの出会いの意味は大きい反面、今までに経験したことがない多種多様なストレスに遭遇し、精神的なゆらぎが大きく不安定になりやすいことも事実であろう。

本研究では、臨地実習をおこなう看護学生の自尊感情は適度なレベルで安定していることが望ましいとの前提に立ち、看護学生のSEの変化の特徴を明らかにすることを目的に、臨地実習の各時期にSEを測定し、縦断的研究をおこなった。この研究により看護基礎教育や臨地実習における学生理解や学生指導の重要な示唆が得られるものと考えられる。

II. 方法

A. 対象

調査対象は、1999年にA看護短期大学に入学した学

生73名である。SEの測定は計3回おこなった。各測定時期は、1回目：2年次基礎看護学実習前（以後1回目と略す）、2回目：2年次基礎看護学実習後（以後2回目と略す）、3回目：3年次領域実習後（以後3回目と略す）である。1回目および2回目の測定時期については、基礎看護学実習は1年次でおこなう見学実習とは異なり、看護学生にとってはじめての本格的な臨地実習となることを考慮し選択した。また3回目の測定時期は、各領域実習開始前についても検討したが、グループ編成による領域実習では、それぞれのローテーションが異なることの影響を考慮し、各領域実習がすべて終了した時点での測定時期を選択した。なお本研究では3回ともに有効回答の得られた42名(57.5%)を分析対象とした。

B. 調査期間

調査期間は2000年11月～2002年1月である。

C. 調査方法

1. SE-I 型式尺度

SEの測定は、遠藤らの開発したSE-I 型式の尺度（遠藤，1981，pp.70-74）を用いた。この尺度は、SEを社会的適応との関係でとらえたジャニスとフィールド（Janis, I.L. & Field, P.B., 1959）の作成したSE測定尺度（①不適切の感情、②社会的禁止、③テスト不安）のうち、「不適切な感情」を測定する23項目を取り出して作成されたものである。この尺度は、大学生に対して調査され、信頼性と妥当性が検証されている。

尺度の使用にあたっては、手続きとして尺度開発の共同研究者に文書により尺度使用の許可を得た。SE-I 型式は、「非常にしばしば感じる」（1点）、「かなりしばしば感じる」（2点）、「時々感じる」（3点）、「たまに感じる」（4点）、「ほとんど全く感じない」（5点）の5段階のリッカート尺度である。しかし本研究に先立ち、対象学生以外の一部在校生に対してパイロットスタディを実施したところ、「時々感じる」と「たまに感じる」の判断が難しいという問題がみられたため、研究者間で検討をおこなった。その結果、本研究では「時々感じる」と「たまに感じる」を「たまに感じる」として、4段階のリッカート尺度として用いることにした。SE-I 型式は得点が高いほど自尊感情が高いことを示す（得点範囲23～92点）。なお質問項目2, 3, 7は逆転項目である。

2. SE-I 型式尺度の信頼性及び妥当性の検討－因子分析（表1）

本研究では、遠藤らの開発したSE-I 型式の尺度（遠藤，1981，pp.70-74）を用いているが、パイロットスタディ後に5段階から4段階へリッカート尺度の変更をおこなったため、尺度の信頼性及び妥当性の検討の

ため因子分析をおこない、クロンバックの α 係数の算出、及び各因子間の相関の確認をおこなった。

遠藤らの研究では「他者からの評価を気にする程度」、「自己の価値観」、「社会的場面における不安」、「劣等感に関する因子」の4因子が抽出されている（遠藤，1981，pp.70-74；遠藤ら，1992，pp.26-36）。本研究ではSE測定を3回おこなっているため、分析対象者42名を延べ126名と考え、主因子法、バリマックス回転による因子分析をおこなった。因子分析における因子数の決定は、固有値が1よりも大きい因子とした。その結果5因子が抽出されたが、一部因子の解釈が困難であったため、累積寄与率、クロンバックの α 係数を確認しながら抽出因子数4の場合に最も因子の解釈がしやすいと判断した。

第1因子は、「他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか」、「あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか」など12項目からなり、「他者からの評価に関する因子」とした。第1因子を構成する12項目のうち、問4, 14, 17の3項目は因子負荷量が0.4以下である。一般に、「各因子ごとに、回転後の因子負荷量の値が0.4以上の質問項目がその因子を構成する質問項目であるとみなすと、因子がどのような概念を表すものなのかを解釈することが容易になる」（土田，1994，p.144）とされているが、因子負荷量の値を0.35とする考え（田中，1996，p.242）や、0.4ないし0.3とする考え（D.F.ポリーットら，1994，p.335）もあり、基準に対する考えはさまざまである。本研究では、因子負荷量が0.4以下の3項目についてはその内容を検討し、第1因子に因子負荷量の値0.4以下の3項目を含めることとした。なお、因子の解釈及び命名にあたっては、主に因子負荷量の値が0.6以上の項目に注目して解釈をおこなった。

第2因子は、「あなたが知っている大部分の人々に比べて自分のほうが劣っていると感じるようなことはありますか」、「一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信を持っていますか」など5項目からなり、「自己の価値観に関する因子」とした。第3因子は、「あなたは、自分について落胆するあまり、何がいったい価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか」、「あなたは、自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか」の2項目からなり、「自己概念の不安定さに関する因子」とした。第4因子は、「あなたは、クラスや自分と同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか」、「人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらよいかについて困りますか」など4項目からなり、「対人場面における不安に関する因子」とした。

表1. SE-I形式：質問項目（23項目）と因子分析結果

		KMO値：0.84				
質 問 項 目		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子 【他者からの評価に関する因子】						
23.	他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか。	0.771	0.001	0.218	0.237	0.698
10.	あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか。	0.713	- 0.047	0.127	0.077	0.532
9.	あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか。	0.629	0.041	0.040	0.216	0.446
22.	あなたの友達や知り合いの中にあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをどのくらい気にしますか。	0.617	- 0.002	0.067	0.145	0.407
15.	他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（または劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。	0.608	- 0.228	0.329	0.137	0.549
19.	他の人が、あなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。	0.605	- 0.052	0.165	0.200	0.436
20.	あなたは、恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。	0.524	0.186	0.134	0.164	0.354
21.	自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気にしますか。	0.517	0.091	0.116	0.303	0.381
11.	あなたは、他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人で行っていきような場合、気兼ねや不安をおぼえますか。	0.506	- 0.021	- 0.041	0.037	0.260
4.	あなたは、自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる事がどのくらいありますか。	0.391	0.086	0.239	0.017	0.218
14.	他の人々がみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合、あなたは普通どのくらい取り乱したり、まごついたり（あがったり）しますか。	0.386	- 0.145	0.328	0.380	0.422
17.	とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたはどのくらい長くそのことを気にしますか。	0.327	0.227	0.024	0.089	0.167
第2因子 【自己の価値観に関する因子】						
1.	あなたが知っている大部分の人々に比べて自分のほうが劣っていると感じるようなことはありますか。	0.153	0.707	0.466	0.181	0.773
7.	一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか。	- 0.043	0.695	0.076	0.044	0.493
3.	あなたは、自分の知っている人々がいつかはあなたを尊敬の目をもって仰ぎ見る日がくると確信していますか。	- 0.087	0.631	- 0.212	- 0.105	0.461
2.	あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。	- 0.005	0.562	0.218	0.257	0.430
8.	あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか。	0.186	0.513	0.458	0.242	0.567
第3因子 【自己概念の不安定さに関する因子】						
5.	あなたは、自分について落胆するあまり、何がいったい価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。	0.182	0.044	0.786	0.021	0.654
6.	あなたは、自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。	0.227	0.205	0.719	0.137	0.629
第4因子 【対人場面における不安に関する因子】						
13.	あなたは、クラスや自分と同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか。	0.132	0.149	0.140	0.746	0.617
16.	人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいかにについて困りますか。	0.203	- 0.028	0.103	0.663	0.493
12.	あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。	0.274	0.151	0.057	0.464	0.317
18.	あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのが難しいですか。	0.244	0.280	- 0.196	0.421	0.354
寄与率 (%)		26.26	10.49	5.51	4.07	
累積寄与率 (%)		26.26	36.75	42.26	46.33	
Cronbach's α		0.87	0.79	0.77	0.71	

主因子法、バリマックス回転

因子分析により抽出された4因子の累積寄与率は46.33%、KMO値（標本妥当性測度）は0.84であった。クロンバックの α 係数は第1因子0.87、第2因子0.79、第3因子0.77、第4因子0.71であった。因子間内の相関（Pearsonの相関係数）では、すべての因子間において有意な正の相関がみられた（表2）。

3. 分析方法

分析方法は、SE-I型式全体、各因子および各項目についてFriedman検定、ボンフェローニの不等式を利用した多重比較（石村, 2006, pp.80-85）をおこなった。ノンパラメトリック検定の多重比較については、「反復測定によるデータや経時測定データの場合、テ

表2. 各因子間の関連（Pearsonの相関係数）

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子	他者からの評価に関する因子	1.000			
第2因子	自己の価値観に関する因子	0.183*	1.000		
第3因子	自己概念の不安定さに関する因子	0.402**	0.353**	1.000	
第4因子	対人場面における不安に関する因子	0.469**	0.313**	0.193*	1.000

* : $p < 0.05$
 ** : $p < 0.01$

ユーキーの方法のようなすべての組み合わせによる多重比較はあまり意味がない」(石村, 2006, p.80) という考え方を参考にし、1回目(基礎実習前)を比較群として、①1回目と2回目、②1回目と3回目の組み合わせで多重比較をおこなった。

群内比較では、SE群別(低群、中群、高群の3群別)にSE-I型式全体、各因子および各項目について同様の分析をおこなった。なお統計ソフトはSPSS14.0J for Windowsを用いた。

D. 用語の定義

本研究において自尊感情とは「個人の自己の価値についての知覚である」という遠藤の定義(遠藤, 1981, p.70)を用いる。

E. 倫理的配慮

対象学生に対しては、研究目的・方法の説明とともに、①研究への協力は自由意思であること、②成績とは無関係であること、③協力の有無により不利益が生

じることはないこと、④本研究の目的以外にはデータを使用しないこと、⑤分析の過程においてデータから個人が特定されないようにすること、⑥データは特定の場所に保管すること、⑦データ処理終了後はプライバシーの保護に十分配慮しデータを処分することについて口頭と文書で説明し、同意書により承諾を得た。また対象者の匿名性確保のため調査用紙は無記名としたが、3回のSE測定の結果変化をみるために、学籍番号を利用し、下2桁を用いたナンバリングをおこなった。無記名とはいえ学籍番号を利用したナンバリングであるため、成績とは無関係であることを保障することが必要であることから、調査分析は全調査終了後におこなうことについて説明をおこない、同意を得た。

III. 結果

A. 各測定時期のSEの得点変化(表3)

SE-I型式全体、各因子および各項目についてFriedman検定、ボンフェローニの不等式を利用した

表3. 基礎実習前・基礎実習後・領域実習後のSE-I形式の得点結果

質 問 項 目	n=42		
	基礎実習前 M ± SD	基礎実習後 M ± SD	領域実習後 M ± SD
第1因子 【他者からの評価に関する因子】	23.3 ± 6.1	24.8 ± 6.3	22.8 ± 5.0
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか。	2.0 ± 0.8	2.1 ± 0.9	1.9 ± 0.6
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか。	1.8 ± 0.7	2.0 ± 0.8	1.8 ± 0.7
9. あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか。	1.7 ± 0.8	2.1 ± 0.8	1.8 ± 0.8
22. あなたの友達や知り合いの中にあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをどのくらい気にしますか。	2.1 ± 0.9	2.2 ± 0.9	2.1 ± 0.8
15. 他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者(または優等生)とみられているか、あるいは失敗者(または劣等生)とみられているかということについて、あなたは気になりますか。	2.3 ± 0.9	2.6 ± 1.0	2.3 ± 0.7
19. 他の人が、あなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。	1.9 ± 0.8	1.9 ± 0.8	1.9 ± 0.7
20. あなたは、恥がしくてどうにもならないと思うことがありますか。	2.2 ± 0.8	2.4 ± 0.8	2.2 ± 0.8
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。	2.2 ± 0.8	2.3 ± 0.9	2.0 ± 0.7
11. あなたは、他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人が入っていくような場合、気兼ねや不安をおぼえますか。	1.5 ± 0.6	1.6 ± 0.7	1.7 ± 0.7
4. あなたは、自分の過誤(ミス)は自分のせいだと感じる事がどのくらいありますか。	1.7 ± 0.6	1.7 ± 0.6	1.4 ± 0.5
14. 他の人々がみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合、あなたは普通どのくらい取り乱したり、まごついたり(あがったり)しますか。	2.1 ± 0.8	2.2 ± 0.9	2.0 ± 0.7
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしでかしたとき、あなたはどのくらい長くそのことを気にしますか。	1.7 ± 0.8	1.8 ± 0.7	1.8 ± 0.8
第2因子 【自己の価値観に関する因子】	11.4 ± 2.8	11.0 ± 3.1	10.6 ± 2.8
1. あなたが知っている大部分の人々に比べて自分のほうが劣っていると感じるようなことはありますか。	2.1 ± 0.9	2.0 ± 0.9	1.9 ± 0.8
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか。	2.1 ± 0.7	2.2 ± 0.8	2.2 ± 0.7
3. あなたは、自分の知っている人々がいつかはあなたを尊敬の目をもって仰ぎ見る日がくると確信していますか。	1.9 ± 0.7	1.9 ± 0.8	1.9 ± 0.8
2. あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。	2.6 ± 0.8	2.4 ± 0.8	2.5 ± 0.8
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか。	2.6 ± 0.8	2.6 ± 0.9	2.1 ± 0.8
第3因子 【自己概念の不安定さに関する因子】	4.0 ± 1.7	3.9 ± 1.6	3.4 ± 1.4
5. あなたは、自分について落胆するあまり、何がいったい価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。	2.3 ± 1.0	2.2 ± 1.0	2.0 ± 0.9
6. あなたは、自己嫌悪をおぼえること(自分で自分がいやになること)がありますか。	1.7 ± 0.8	1.7 ± 0.7	1.5 ± 0.6
第4因子 【対人場面における不安に関する因子】	8.3 ± 2.4	8.5 ± 2.4	8.8 ± 2.2
13. あなたは、クラスや自分と同年代の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか。	1.9 ± 0.8	1.9 ± 0.9	1.9 ± 0.8
16. 人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいかに困りますか。	2.4 ± 0.9	2.5 ± 0.8	2.6 ± 0.8
12. あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。	1.8 ± 0.6	1.8 ± 0.7	1.8 ± 0.6
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのが難しいですか。	2.2 ± 0.8	2.3 ± 0.9	2.4 ± 0.9
合 計	47.0 ± 9.8	48.2 ± 10.3	45.6 ± 7.5

Friedman検定、多重比較(ボンフェローニの不等式による修正)

*: p < 0.05

多重比較をおこなった結果、SE-I 型式の合計得点の平均値は、1 回目47.0±9.8点 2 回目48.2±10.3点 3 回目45.6±7.5点であり、有意差はみられなかった。

また各因子については、第1 因子「他者からの評価に関する因子」のみ有意差がみられ、1 回目23.3±6.1点 2 回目24.8±6.3点 3 回目22.8±5.0点と、2 回目の得点が1 回目の得点に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。第1 因子以外の因子において有意差はみられなかったが、第4 因子「対人場面における不安に関する因子」は、徐々に得点が高くなる傾向がみられた。

各項目については有意差がみられたのは4 項目(問4, 8, 10, 15)であった。問4「あなたは、自分の過誤(ミス)を自分のせいだと感じる事がどのくらいありますか」と、問8「あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになる事がどのくらいありますか」は、ともに3 回目の得点(問4: 1.4±0.5、問8: 2.1±0.8)が1 回目の得点(問4: 1.7±0.6、問8: 2.6±0.8)よりも有意に低かった ($p < 0.05$)。

また問10「あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか」と、問15「他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者(または優等生)とみられているか、あるいは失敗者(または劣等生)とみられているかということについて、あなたは気になりますか」では、2 回目の得点(問10: 2.0±0.8、問15: 2.6±1.0)が1 回目の得点(問10: 1.8±0.7、問15: 2.3±0.9)に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。問10問15はともに「他者からの評価に関する因子」を構成する項目であるが、この因子を構成する他の10項目すべてにおいて、2 回目の得点が1 回目に比べて高い傾向がみられた。

B. SE群別にみた各測定時期のSEの得点変化(表4)

基礎看護学実習前(1 回目)のSE-I 型式の合計得点の平均値±標準偏差により、SE低群、SE中群、SE高群の3 群に群別し、群毎のSE-I 型式全体、各因子および各項目の得点変化をみた。

SE低群6 名は、1 回目合計得点33.3±3.4点 2 回目34.5±7.9点 3 回目37.8±7.2点であり有意差はみられなかったが、1 回目2 回目3 回目と経過するにつれて得点は高くなる傾向がみられた。各因子及び各項目において有意差がみられたものはなかった。

SE中群27名は、1 回目合計得点45.0±4.7点 2 回目46.9±5.8点 3 回目44.5±5.8点と得点の変化は少なく、有意差はみられなかった。各因子において有意差がみられたのは、第1 因子「他者からの評価に関する因子」が、1 回目22.2±3.8点 2 回目24.1±4.5点 3 回目22.8±4.2点であり、2 回目の得点が1 回目の得点に比べて有意に高かった ($p < 0.05$)。各項目において有意差がみられたのは3 項目であり、いずれも「他者からの評

価に関する因子」を構成する項目であった。

SE高群9 名は、1 回目合計得点61.9±3.7点 2 回目61.4±6.9点 3 回目54.1±4.2点であり有意差はみられなかったが、1 回目2 回目3 回目と経過するにつれて得点は低くなる傾向がみられた。各因子において有意差がみられたものはなく、各項目において有意差がみられたのは問8のみであり、3 回目の得点が1 回目よりも有意に低かった ($p < 0.05$)。

IV. 考察

A. 各測定時期のSEの得点変化

SE-I 型式の合計得点は、各測定時期により有意な差はみられず、RosenbergのSE尺度(10項目)を使用した菅野らの先行研究の結果(菅野ら, 1997, pp.129-131)との相違がみられた(表3)。

菅は、RosenbergのSE尺度とSE-I 型式尺度の原型であるJanisらの尺度との高い相関関係について報告している(菅, 1984, pp.21-27)。これらよりSE-I 型式を使用した本研究においても各測定時期によりSEは変化すると考えたが、得点の有意な変化はみられなかった。これについては本研究における因子分析では、「他者からの評価に関する因子」を構成する項目が12項目と多く、対象者の「看護学生」という立場、及び他者評価を必ずともなう実習を通しての調査であることがかなり影響したのではないかと考察する。また多くの先行研究では、ある特定の領域における臨地実習前後のSE測定がおこなわれているが、本研究の調査は2 年次～3 年次にかけての長期間にわたるものであることから、臨地実習によるSEの変化のみを抽出することが難しく、結果としてSEの有意な変化に結びつかなかったと考える。

各因子の得点に有意差がみられたのは、第1 因子「他者からの評価に関する因子」のみであり、基礎看護学実習後の得点が基礎看護学実習前に比べて有意に高かった(表3)。また各項目の得点に有意差がみられた4 項目のうち、問10「あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか」と、問15「他の人々から、あなたが職業や経歴における成功者(または優等生)とみられているか、あるいは失敗者(または劣等生)とみられているかということについて、あなたは気になりますか」の2 項目は、第1 因子「他者からの評価に関する因子」を構成する項目であり、いずれも基礎看護学実習後の得点が基礎看護学実習前に比べて有意に高かった。そしてこの因子を構成するその他の10項目の得点についても基礎看護学実習後の得点が高い傾向がみられた。これらのことより基礎看護学実習は、学生にとって患者とかかわるはじめての本格的な実習であるが、学生は臨地実習指導者や教員の評価を気にしすぎるこ

表4. SE群別によるSE-I形式の得点結果

質 問 項 目	基礎実習前 SE 低群 (n=6)			基礎実習前 SE 中群 (n=27)			基礎実習前 SE 高群 (n=9)		
	基礎実習前	基礎実習後	領域実習後	基礎実習前	基礎実習後	領域実習後	基礎実習前	基礎実習後	領域実習後
	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD	M ± SD
第1因子【他者からの評価に関する因子】	16.3±2.9	17.5±5.5	18.3±4.7	22.2±3.8	24.1±4.5	22.8±4.2	31.3±4.8	31.8±5.0	27.3±4.5
23. 他人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたはどのくらい気になりますか。	1.3±0.5	1.3±0.8	1.3±0.5	1.9±0.6	2.0±0.8	1.9±0.5	2.9±0.9	2.9±0.6	2.6±0.5
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評をどのくらい気にしますか。	1.2±0.4	1.2±0.4	1.3±0.5	1.7±0.6	2.0±0.6	1.7±0.6	2.4±0.5	2.7±0.9	2.3±0.7
9. あなたは、自分が他の人々とどのくらいうまくやってゆけるかということについて気にしますか。	1.3±0.8	1.3±0.5	1.2±0.4	1.6±0.7	2.0±0.7	1.9±0.8	2.4±0.5	2.7±0.9	2.1±0.9
22. あなたの友達や知り合いの中にあなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるとき、あなたはそのことをどのくらい気にしますか。	1.5±0.8	1.3±0.8	1.5±0.5	2.0±0.7	2.1±0.8	2.1±0.8	2.9±1.1	2.9±0.9	2.2±1.0
15. 他人々から、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（または劣等生）とみられているかということについて、あなたは気にしますか。	1.7±0.8	1.8±1.2	1.8±0.8	2.2±0.8	2.6±0.9	2.2±0.7	2.9±0.8	3.0±0.7	2.9±0.3
19. 他人が、あなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。	1.0±0.0	1.3±0.8	1.5±0.5	1.8±0.7	1.8±0.7	1.9±0.6	2.8±0.7	2.3±1.0	2.0±0.7
20. あなたは、恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。	1.7±0.5	2.0±0.6	1.7±0.5	2.1±0.7	2.3±0.8	2.1±0.7	2.8±0.8	3.1±0.6	2.8±0.9
21. 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。	1.5±0.5	1.5±0.5	1.7±0.8	2.1±0.7	2.2±0.8	2.0±0.6	3.0±0.7	3.1±0.6	2.3±0.9
11. あなたは、他人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人が入っていくような場合、気兼ねや不安をおぼえますか。	1.2±0.4	1.3±0.5	1.5±0.5	1.5±0.6	1.6±0.6	1.7±0.7	1.9±0.6	1.9±0.8	2.0±0.7
4. あなたは、自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる事がどのくらいありますか。	1.3±0.5	1.5±0.5	1.7±0.8	1.7±0.6	1.6±0.5	1.3±0.5	2.1±0.6	2.1±0.8	1.6±0.5
14. 他人々が見ているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合、あなたは普通どのくらい取り乱したり、まごついたり（あがったり）しますか。	1.3±0.5	1.3±0.5	1.7±0.5	2.0±0.6	2.3±0.8	1.9±0.7	2.9±0.6	2.7±0.9	2.4±0.7
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしたとき、あなたはどのくらい長くそのことを気にしますか。	1.3±0.8	1.5±0.5	1.5±0.8	1.6±0.7	1.7±0.6	1.8±0.7	2.3±0.9	2.4±0.7	2.0±0.9
第2因子【自己の価値観に関する因子】	9.2±1.5	8.7±1.5	9.8±2.3	10.9±2.1	10.6±2.3	10.2±2.5	14.6±2.9	13.8±4.3	12.2±3.7
1. あなたが知っている大部分の人々に比べて自分のほうが劣っていると感じるようなことはありませんか。	1.3±0.5	1.3±0.5	1.3±0.5	2.0±0.7	1.8±0.8	1.8±0.6	3.2±0.8	2.9±0.9	2.6±1.0
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力についてどのくらい自信をもっていますか。	1.5±0.8	2.0±1.1	2.3±0.8	2.1±0.5	2.1±0.5	2.2±0.6	2.6±0.7	2.6±1.1	2.3±1.0
3. あなたは、自分の知っている人々がいつかはあなたを尊敬の目をもって仰ぎ見る日がくると確信していますか。	1.8±0.8	2.0±0.6	2.0±0.9	1.8±0.6	1.8±0.8	1.7±0.8	2.2±0.8	2.0±1.1	2.1±0.9
2. あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。	2.5±0.8	1.7±0.5	2.3±0.5	2.4±0.7	2.4±0.6	2.3±0.8	3.2±0.7	3.0±0.9	3.0±0.9
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか。	2.0±0.0	1.7±0.8	1.8±0.4	2.5±0.7	2.5±0.8	2.2±0.7	3.3±0.7	3.3±0.7	2.2±1.0
第3因子【自己概念の不安定さに関する因子】	2.7±0.5	3.0±1.5	2.7±0.8	3.9±1.6	3.7±1.5	3.3±1.3	4.9±1.9	5.1±1.5	4.2±1.7
5. あなたは、自分について落胆するあまり、何がいったい価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。	1.7±0.5	1.7±1.0	1.5±0.5	2.3±1.0	2.1±1.0	2.0±0.9	2.7±1.2	2.9±0.9	2.2±1.1
6. あなたは、自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。	1.0±0.0	1.3±0.5	1.2±0.4	1.7±0.8	1.6±0.7	1.3±0.6	2.2±0.8	2.2±0.7	2.0±0.7
第4因子【対人場面における不安に関する因子】	5.2±1.0	5.3±1.2	7.0±1.7	8.0±1.5	8.4±1.7	8.6±2.2	11.1±2.1	10.8±2.7	10.4±1.5
13. あなたは、クラスや自分と同年輩の人々のグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり、不安に思ったりしますか。	1.3±0.5	1.3±0.5	1.5±0.5	1.7±0.6	1.7±0.7	1.9±0.8	2.9±0.6	2.7±1.2	2.3±0.9
16. 人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらよいかについて困りますか。	1.2±0.4	1.3±0.5	2.0±0.9	2.4±0.7	2.6±0.6	2.6±0.8	3.1±0.9	2.9±0.6	2.9±0.6
12. あなたは、人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。	1.3±0.5	1.5±0.5	1.7±0.5	1.7±0.5	1.7±0.6	1.7±0.5	2.3±0.5	2.3±1.0	2.2±0.8
18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのが難しいですか。	1.3±0.5	1.2±0.4	1.8±0.4	2.2±0.8	2.4±0.8	2.4±0.9	2.8±0.8	2.9±0.8	3.0±0.9
合 計	33.3±3.4	34.5±7.9	37.8±7.2	45.0±4.7	46.9±5.8	44.5±5.8	61.9±3.7	61.4±6.9	54.1±4.2

Friedman 検定、多重比較（ボンフェローニの不等式による修正）
* : p < 0.05

く、実習に取り組むことが出来ていたのではないかと推察する。またはじめての本格的な実習を終えた達成感が、基礎看護学実習後の得点の高さに反映されたのではないだろうか。

問4「あなたは、自分の過誤（ミス）を自分のせいだと感じる事がどのくらいありますか」と、問8「あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになることがどのくらいありますか」の2項目は、領域実習後の得点が基礎看護学実習前よりも有意に低かった。これは、基礎看護学実習に比べて長期間にわたる各領域の実習では、学生が主体的に考

え行動することが次第に多くなることや、「自分の能力の不確かさを誰よりも痛感している」（中西, 1983, pp.63-66）学生の傾向が反映されたのではないかと考える。

第4因子「対人場面における不安に関する因子」は、各測定時期において有意差はみられなかったが、1回目2回目よりも3回目の得点が高かった。また全23項目のうち、3回目の得点が高かった3項目（問11, 16, 18）のなかで、問16「人と一緒にいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらよいかについて困りますか」、問18「あなたは、初対面の人に会ったとき、

時間つぶしに話をするのが難しいですか」は第4因子を構成する項目であるが、これらの項目の得点変化についても有意差はみられなかった。「対人場面における不安に関する因子」の得点が徐々に高くなることは、学生が実習経験を通して、他者からの評価を気にしながらも新しい環境に適応していることや、初対面の人に接する時の心配や不安に、ある程度自信をもって対応できるような変化がみられるということだと考える。そのように考えると、この変化は実習を通しての成長と捉えることができるのではないだろうか。しかしこれらは有意な得点変化としてあらわれていない。そのため今後は、学生が対人場面における対応に自信をもち、自尊感情を高めることにつながるような教員のかかわりについて明らかにしていくことが必要であろう。

B. SE群別にみた各測定時期のSEの得点変化

SE低群、SE中群、SE高群の3群に群別し、群毎のSE-I型式全体、各因子および各項目の得点変化をみた結果、3群ともにSE-I型式全体の合計得点に有意な差はみられなかったが、SE低群は1回目2回目3回目と経過するにつれて得点は高くなる傾向がみられた。またSE中群の得点変化は少なく、SE高群は徐々に得点が低くなる傾向がみられた(表4)。

福田らは精神看護学実習前にSEが特に高かった学生のSE得点が、実習後に低下したことについて「自信喪失からくる自尊感情の低下などではなく実習を通して自己を客観的に捉え受け止められた結果である」(福田ら, 2000, pp.24-26)と考察している。このことから考えると、SE低群の学生が徐々に得点が高くなる傾向や、SE高群の学生の領域実習後の得点の低下は、ともに自己理解や自己洞察により自己をより客観視することができるようになり、自己の価値についての知覚が適切にできるようになった学生の成長の結果ではないかと考察する。

一般に、SEが高すぎる場合には「防衛や虚勢、現実吟味の不足などの問題がある」(菅, 1984, p.24)といわれている。逆にSEが低くなると「劣等感・無価値観にさいなまれ、不適応に陥る恐れがある」(遠藤, 1981, p.86)といわれており、SEを適度な水準に保つことが重要である。これらのことから考えると、SE低群の得点が徐々に高くなりSE高群の得点が徐々に低くなる傾向は、好ましい変化であり、臨地実習がSEを適度な水準に保つ過程を有するのではないかと考える。しかしSEが高すぎる、または低すぎる学生に対しては、不適応の症状が現れないように適切に介入することが必要になってくる。酒井は自己教育力とSEの関連に関する研究において、「低SE群の学生のほとんどが今までにくじけてもうだめだと思ったことがあると答え、全員が教師に認められていないと答え、

SE高群の学生の回答傾向との違いがみられた」(酒井, 2000, pp.113-125)と報告している。このことから個々の学生の自尊感情の状態を考慮した細やかな対応が重要であり、学生の自尊感情を適度な水準に維持することにつながるようなサポートを明らかにしていく必要があると考える。

V. 結論

本研究では、臨地実習をおこなう看護学生の自尊感情は適度なレベルで安定していることが望ましいとの前提に立ち、看護学生のSEの変化の特徴を明らかにすることを目的に、臨地実習の各時期にSE測定を3回実施し、縦断的研究をおこなった結果、以下のことが明らかになった。

- A. 各測定時期のSE-I型式合計得点では、1回目基礎看護学実習前、2回目基礎看護学実習後、3回目領域実習後において有意差はみられなかった。
- B. 「他者からの評価に関する因子」は、基礎看護学実習後の得点が基礎看護学実習前に比べて有意に高かった。
- C. 「対人場面における不安に関する因子」は、各測定時期において有意差はみられなかったが、徐々に得点が高くなる傾向がみられた。
- D. SE群別にみた各測定時期におけるSE-I型式合計得点では、有意差はみられなかったが、SE低群の学生は徐々にSEが高くなる傾向がみられ、SE高群の学生は徐々にSEが低くなる傾向がみられた。

VI. 本研究の限界

本研究の対象者は、ひとつの看護短期大学の学生に限定されているため、本研究の結果を一般化するには不十分である。本研究では、看護基礎教育における臨地実習の各時期に自尊感情を測定し、縦断的研究をおこなったが、今後は使用する自尊感情尺度の信頼性と妥当性の検証、ならびに測定時期・回数検討が必要である。また学生の自尊感情の変化は臨地実習によるものだけとは考えられず、今後は臨地実習以外の要因を明らかにすることや、自尊感情を適度な水準に維持することにつながるサポートについての研究も必要と考える。

謝辞

最後に、本研究を行うにあたり調査にご協力下さいました学生の皆さまに深謝いたします。

なお本論文の一部は、第11回日本看護研究学会 東海地方会 学術集会(2007.3)において発表したものである。

Ⅶ. 文献

- D.F.Polit, B.P.Hungler (1987). / 近藤潤子監訳(1994).
看護研究 原理と方法. 医学書院.
- 遠藤辰雄編(1981). アイデンティティの心理学. 京都,
ナカニシヤ出版.
- 遠藤辰雄, 井上祥治, 蘭千尋 (1992). セルフ・エス
ティームの心理学 自己価値の探求. 京都, ナカ
ニシヤ出版.
- 福田由紀子, 小林純子 (2000). 精神看護学実習にお
ける学生の学習課題達成感と自尊感情との関連.
第31回日本看護学会集録-看護教育-, pp.24-26.
- 石村貞夫 (2006). SPSSによる分散分析と多重比較の
手順 第3版. 東京, 東京図書.
- 梶田毅一 (2002). 自己意識の心理学 第2版. 東京,
東京大学出版会.
- 梶谷佳子, 村上明美, 志水奈保子, 三輪昌子 (1996).
臨床実習における患者-学生関係と学生の自尊感
情の関連. 神戸市立看護短期大学紀要, 第15号,
pp.133-143.
- 片岡三佳, 小林純子 (1999). 精神看護学実習におけ
る学生のコミュニケーション状況と自尊感情と
の関連. 日本赤十字愛知短期大学紀要, 第10号,
pp.55-66.
- 看護学教育の在り方に関する検討会 (2002). 大学に
おける看護実践能力の育成の充実に向けて. 看護
学教育の在り方に関する検討会報告, 20.
- 菅佐和子 (1984). SE (Self-Esteem) について. 看護
研究, 17 (2), 21-27.
- 菅野久美子, 米沢久子, 瀬戸奈穂美, 中村凧 (1997).
看護学生の自尊感情の変化 - 臨地実習生の実習
前後のSE比較および満足感との関係 -. 第28回
日本看護学会集録-看護教育-, 129-131.
- 中西睦子 (1983). 臨床教育論 体験からことばへ.
東京, ゆみる出版.
- 酒井明子 (2000). 看護学生の自己教育力に関連する
要因 - Self-esteemの高低に焦点をあてて -.
福井医科大学研究雑誌, 1 (1), 113-128.
- 田中敏 (1996). 実践心理データ解析 問題の発想・
データ処理・論文の作成. 東京, 新曜社.
- 土田昭司 (1994). 社会調査のためのデータ分析入門
実証科学への招待. 東京, 有斐閣.